

科目「国際理解」のための教材開発

稲田 克二*

I. 科目「国際理解」の登場

(1) 「国際教養科」設置の経緯

今日の社会の変化は大きくかつ急速であり、それは「情報化」「多様化」「国際化」などの言葉で表現される場合が多い。このような変化に対して学校教育も大きな変革が求められており、これに対応する教育改革として、昭和62年12月に教育課程審議会が教育課程の基準の改定を文部大臣に答申した。

この答申では前回の教育課程の基準改定以後の学校を取り巻く社会状況の変化や、学校教育の現状と課題に適切に対応するとともに、社会の変化とそれに伴う生徒の生活の変化や意識の変容に対応するための教育課程の基準の改善として、「心豊かな人間の育成」「自己教育力の育成」など4点が示されたが、その1つに「文化と伝統の尊重と国際理解の推進」がうたわれた。この答申に基づき平成元年3月に高等学校学習指導要領が改訂されたが、その改定の趣旨も教育課程の基準の改定に則り4点からなるが、その1つに「国際理解を深め、わが国の文化と伝統を尊重する意欲と態度の育成を重視すること」が盛り込まれ、国際社会に生きる日本人として必要な資質を養うことが重視されることになった。

以上の経過をふまえて、各都道府県教育委

員会の段階で「国際化」に対応する学校の課程として「国際教養科」が1980年代の後半から東京都立国際高等学校をはじめ、全国の高等学校に設置されはじめた。大阪府においてもこの流れの中で、1990年に大阪府立千里高等学校と同住吉高等学校に「国際教養科」が設置され、以後1992年までに大阪府の9つの学区の9校に「国際教養科」が設置された。

(2) 「国際教養科」の目的と特色

この様な経過の中で大阪府教育委員会は新しく設置した国際教養科の目的として、わが国の文化や伝統に対する理解と関心を深め、世界の国々の文化や伝統を理解し尊重する態度を養う。(以下略)などをあげている。そしてこの目的を果たすための教育課程として、英語表現・LL 演習・速読演習・外国事情など30単位の専門科目が設定され、その専門科目の1つとして科目「国際理解」が置かれたのである。

(3) 科目「国際理解」の法的位置付け

この科目「国際理解」は従来のわが国の高等学校の教育課程の中にはみられなかったものであるため、その「法的」性格として次の様に規定された。

大阪府立高等学校教育課程基準(以下「府基準」という)によれば、「指導要領」第1章第2款の表に示されている各教科以外の各教科(以下「その他特に必要な教科」という)

* 大阪府立千里高等学校

については「府基準」第2章第2に示すところによるものとされ、そこに「その他特に必要な教科」として福祉・食品産業・モダンクラフトなどと並んで教科「国際教養」が設定されており、その教科「国際教養」を構成する科目として速読演習・英会話・第二外国語と並んで科目「国際理解」が設定されている。

そしてこの科目「国際理解」の目標としては、「言語表現・世界経済・比較文化などを学習することにより、国際理解の基礎を得させる。」とあり、その内容として「(1) 言語表現、(2) 世界経済、(3) 社会生活、(4) 比較文化、(5) 歴史、(6) 地理、(7) 科学、(8) その他国際理解に関すること」と示されている。

(4) 科目「国際理解」の教科としての性格

では実際に科目「国際理解」は教科としてどのような性格を持っているかということ、大阪府教育委員会が作成した国際教養科専門科目「国際理解」指導資料集によれば、ア. 平和な人間の育成 イ. 人権意識の涵養 ウ. 自国認識と国民的自覚の涵養 エ. 他国・他民族・他文化の理解の増進 オ. 国際的相互依存関係と世界の共通重要課題の認識に基づく世界連帯意識の形成 カ. 国際協調・国際協力への実践的態度の養成 の6つから構成され、具体的内容として

- (1) 文化理解
 1. 日本の文化
 2. 比較文化
 3. 国際化と日本
- (2) 社会理解
 1. 国際政治と国際経済
 2. 人権と福祉
 3. 社会生活
- (3) 環境理解
 1. 資源開発
 2. 環境問題
- (4) 表現
 1. コミュニケーション

2. 映像と演劇

からなりたっている。

以上のように科目「国際理解」はただ単に外国の様子を知るだけではなく、円滑な意志の疎通により他と我との違いを認めあい、それに共感し、協調し、協力しあえる平和的な人間の育成をはかるということが大きな目標となっている。その目的をはたすために、他国・他民族・他文化を正しく理解することが求められるのであり、その過程で地理学がはたす役割が大きいと思われる。

(5) 地理学が寄与できるもの

科目「国際理解」はその趣旨からして多くの分野で土地を舞台とする人間の活動を研究するという内容が含まれている。これはつまるところ地理学の目的とも一致するものであり、この教材を開発するには「地理的視点」が特に必要となってくるのである。とりわけ「文化理解」や「環境理解」の分野においては、自然環境と人間生活との関係を把握することが重要であるので、この視点からアプローチができる地理教育の専攻者が活躍できる部分であると考えられる。このように科目「国際理解」は従来にない新しい科目であり、地理教育に携わる者が積極的に取り組むことにより大きな成果が得られると考えられる。

II. 教材開発にあたって

さてこの教科「国際理解」の授業を実施するにあたって最大の問題点は生徒が使用する教科書が無いことであった。そこで教科書に代わる教材を開発する必要が生まれ、筆者の勤務校では社会科の教員でチームを作り共同で教材の開発にあたった。そこで検討された

指導内容は、まず「文化について」、「地域研究」等の大項目を設定し、そのうち例えば「地域研究」では、「東アジア」、「東南アジア」、「中央アジア」、「オセアニア」等の9つの地域に区分しそれらを中項目とし、さらに各地域で最も特徴的なテーマを選びそれを小項目として構成した。筆者はそのうち中項目の「東南アジア」「中央アジア」「オセアニア」を担当し「東南アジア」については小項目としてマレーシアの複合社会①、②、シンガポールの奇跡、「中央アジア」についてはモンゴル①、②、オアシスの世界、「オセアニア」については移民の国、三つのネシア、複雑な政治形態の9つの教材の開発を担当した。

教材開発にあたっては、高校2年生の生徒が1年間2単位で学習することを考慮に入れ、1つの小項目を50分で指導するものとして、従来の教科書の記述よりは少し詳細な内容・水準を維持するものとし、あまり高度で専門的な内容には深入りせず、生徒が書店で購入できる一般教養書の内容等を教材化することとした。そのため一部の教材では古い資料や文献に基づいて作成されたため不十分な内容のものもあった。

Ⅲ. 開発した教材の構成

ここでは、前述の方法により開発した小項目の教材の構成を示す。

この教材は大きく分けて3つの部分から構成される。第1は「内容の整理」である。これはいわゆる板書事項であり、授業の要点を黒板に記述するための教師用の資料である。第2は「授業内容」でこの教材の中心をなす部分である。「内容の整理」に従って、教師

が口頭で説明・発問しながら授業をすすめるための材料である。第3は「補充資料」である。これは授業内容をさらに充実させるためのもので、地図・図表・写真・授業内容に関連のある文章などをまとめたものである。生徒用、教師用各 B4 版大プリント1枚からなるものである。(但し本稿では紙面の都合上省略し、この「補充資料」を使用する部分に名称だけを記入した。)

Ⅳ. 教材の一例

ここでは以上の構成で作成した小項目の教材の一例を示す。

教材名 「中央アジア」 3 オアシスの世界

I 授業のねらい

1. 人間の種々の生活様式のひとつである、砂漠での定住生活とはどのようなものであるかを理解させる。
2. 中央アジアのオアシスが単に農耕の場所ではなく、交易の拠点になっていることを理解させる。

II 授業内容

導 入

オアシスという言葉から何を想像するか問い、生徒のもっているオアシスのイメージを整理しながらそこでの人々の生活様式を理解させる。

展 開

1. オアシスとは 「補充資料1」
オアシスとは乾燥地域のなかでも、常に淡水が得られ樹木も育ち、人間の生活をゆるす地点である。砂漠では水が容易に得られないため定住生活は困難であるが、夏には気温も高くなるし土壌も肥えているので水さえ得ら

第1表 中央アジア3 オアシスの世界

節のねらい

1. オアシスを中心とする中央アジア南部の生活様式を理解させる。
2. オアシスの構造と機能を理解させる。
3. オアシスを結んだものがシルクロードであることを理解させる。

内容の整理

<p>1. オアシスとは 乾燥地域のなかでも、常に淡水が得られ樹木が育ち人間の生活を許す地点</p> <p>オアシスの種類</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 泉性オアシス、2. 山麓オアシス、3. 外来河川沿岸のオアシス、 4. 掘りぬき井戸によるオアシス <p>2. 中央アジアの地域区分</p> <p>北部→草原地帯→遊牧生活（移動生活） 南部→砂漠地帯→オアシスでの定住生活</p> <p>中央アジアの南部とは</p> <table border="0"> <tr> <td>パミール高原の東部</td> <td rowspan="2">}</td> <td rowspan="2">シンチャウイグル自治区</td> </tr> <tr> <td>チベット高原の北部</td> </tr> </table> <p style="text-align: center;">↓ ↓ ↓</p> <table border="0"> <tr> <td>北</td> <td>天山山脈</td> <td rowspan="3">•</td> <td rowspan="3">タクラマカン砂漠</td> </tr> <tr> <td>西</td> <td>カラコルム山脈</td> </tr> <tr> <td>南</td> <td>クンルン山脈</td> </tr> </table> <p>3. 中央アジアのオアシス 山脈の山麓に点在する山麓オアシス</p> <p>4. オアシスの構造 中心都市と周辺農村部</p> <p>5. オアシスの機能 中心都市—交易（オアシス内とオアシス外） 周辺農村部—農耕</p> <p>6. シルクロード 交易拠点であるオアシスを結んだもの</p>	パミール高原の東部	}	シンチャウイグル自治区	チベット高原の北部	北	天山山脈	•	タクラマカン砂漠	西	カラコルム山脈	南	クンルン山脈
パミール高原の東部	}			シンチャウイグル自治区								
チベット高原の北部												
北	天山山脈	•	タクラマカン砂漠									
西	カラコルム山脈											
南	クンルン山脈											

れれば生産地になる。得られる水の性格により

- a. 泉性のオアシス 乾燥した地表の下にも地下水は存在するため、その地下水が湧き出て泉となったもの。
- b. 山麓のオアシス 大山地の山麓には扇状地が形成されるが、その扇端から湧水となっ

ているもの。

- c. 砂漠地域外から砂漠地域に流入する外来河川の沿岸部。
 - d. 掘りぬき井戸によるオアシス 被圧地下水層にとどく深井戸である掘りぬき井戸により湧水が得られるもの。
- などの種類があるが、中央アジアの場合は山

麓オアシスである。

2. 中央アジアの地域区分

中央アジアの北部はモンゴル高原で、そこは草原であり動物を移動させながら生活する遊牧地域であるが、南部は広大な砂漠地域となっている。北を天山山脈、西をカラコルム山脈、南をクンルン山脈で囲まれた広大な砂漠地域がタクラマカン砂漠である。この砂漠の周囲にオアシスが点在する。通常の状態であれば砂漠では生活はできないが、大山脈の山麓から湧水があるため人々はそこで定着生活を送っている。

3. 山麓オアシス

この山麓オアシスの水源は山地の万年雪の融水である。カラシャフル、ブグル、クチャ、アクスは天山山脈からの融水によるオアシスであり、ヤルカンド、ホータン、ケリアなどはクンルン山脈からの融水によるものである。原初のオアシスはこれらの自然の湧水地の周囲に形成されたのであるが、より多くの生産をあげ、より多くの人口を支えるためには耕地の拡大が必要となってくる。そのためには自然の湧水だけでは水量が不足するため、人工的に地下水路を作り地下水を集落まで導く必要が生じてくる。この地下用水路がカレーズ、カナート（中国語でカルアルチン）である。このようにオアシスとは自然の湧水だけではなく、人工地下水路により人為的に作られた砂漠の中の集落なのである。

4. オアシスの構造 「補充資料2」

オアシスの農村地帯の中には都市区域がある。少し規模の大きなオアシスであれば必ず都市がある。オアシス農村社会はオアシス都市国家ともよばれる。都市を中核とするオアシス群がある程度まとまって独立的な政治・

経済単位を形づくるのが歴史上は多かった。これらの都市はいずれも城壁をもった城郭都市である。たとえば6世紀ころのホータンには大城が五つ、小城が数十あった。13世紀ころにはトルファン盆地全体では24の城があったといわれている。そしてそれぞれの都市は、農村に取り囲まれているのが普通であった。

5. オアシスの機能

オアシスの機能の第一は周辺の農村部での農業生産活動である。穀物としては麦、粟、稗、とうもろこしが重要な生産物である。その他ナツメ、ブドウ、ナシ、モモ、アンズ、ザクロなどの果実も栽培する。ほかに綿、麻や瓜類、豆類、胡麻、野菜も古くから栽培されてきた。そのほか一部では牧畜も行なわれてきた。

また一方都市部ではこのような農村部で生産された農作物の交易がおこなわれてきた。例えば19世紀のカシュガルの農村部では、商品作物として綿花が栽培され、それを原料として綿布生産が盛んであった。この綿花・綿布・綿糸のほかに小麦、米、野菜などの農産物がバザールにもってこられ、衣類・香辛料・靴・食器・石けん・木工製品その他の手工業製品や他の地域で生産された農作物などと交換されていた。このようにオアシスの都市の機能には、周辺の農村社会の政治・経済の中心であるという点が重要であった。

次にオアシスの都市の機能として重要なものは、都市相互の交流の拠点であるということである。隣り合うオアシスどうしの連絡は次々と遠いオアシスへ結ばれていき、「シルクロード」の一つが出現する。中国産の絹が地中海世界に伝わっていったルートの一つがこれらのオアシスをぬっていったことは明白

である。しかしこのルートは絹だけが運搬されたものではなく、各オアシスそれぞれの特産品が交換され互いに不足する品物を補い合うためのルートでもあったのである。

例えばホータンでは玉、カシュガルではじゅうたんや毛布、クチャでは鉄や銅、トルファンでは綿花が各々特産品であった。これらの品物もまたシルクロードで運搬されていたのである。

6. 隊商の役割 「補充資料3」

さらにこのような物産を大量に買い入れる勢力の一つが、中国の諸王朝であった。朝貢形式で中国王朝が許可した官貿易で、西域のこれらのオアシス都市国家は大量の物資を東方に運び、その見返り品の最重要品目が絹であったのである。このように北はシベリア、東は中国、西はイランという広い地域と交易をすることは、大きな利益を得ることができると同時に、自然災害や盗賊・掠奪等の危険を伴った。そこでこの交易の安全を確保するために組織されたのが隊商である。これは危険の分散と自営力の確保の利点があるほか、大量輸送が可能になりさらに多くの利潤を生むことができるようになった。オアシスの支配者はこの貿易商人の頭目でもあり、外交権を握って隊商の派遣権限を持ち、その権利を隊商長に売り莫大な利益を得ていた。このようにして隊商が組織され、オアシスからオア

シスへと移動していったのである。その結果オアシスは貿易の中継地としての機能も持ちはじめ、商業都市的・宿場町的・隊商基地的性格を備えた複合的機能を持つようになったのである。このように中央アジアのオアシスは、周辺農村で農業生産活動が行なわれ中心都市で非農業生産物と交換され、次に他のオアシスとの特産品との交易の場となり、さらに諸外国との貿易拠点となっていったのである。このようなオアシスをつないだものが「シルクロード」であったのである。

注

- 1) 文部省『高等学校学習指導要領解説』、1989、3頁。
- 2) 前掲書1)、3頁。
- 3) 大阪府教育委員会『平成7年度府立学校専門学科ガイド』、1993。
- 4) 大阪府教育委員会『大阪府立高等学校教育課程基準』、1989、24～26頁。
- 5) 前掲書4)、25頁。
- 6) 「国際教養科」教材開発研究委員会編『国際教養科 専門科目「国際理解」指導資料集』、大阪府教育委員会、1994、1～2頁。

参考文献

- 竹内均編『悠久の大地 中国』、教育社、1985、114～125頁。
 護 雅夫『草原とオアシスの人々』、三省堂、1984、64～82頁。
 陳舜臣『天山南路の旅 トルファンからクチャへ』、日本放送協会、1984、78～88頁。